

サビエル生誕五百年



### 48カ所の仮設住宅

被災地ボランティア記③

東日本震災で被災して現在も仮設住宅に住んでいる人は三十二万人を超える。そのうち今回訪れた岩手県大槌町では、四十八カ所



集会所から自分の

仮設住宅に帰る老婦人

に二千四百六十六戸の仮設住宅が建てられ、四千六百五十四人が生活しているというから、町民の三人に一人が仮設住宅にいたることになる。また今回の震災での町民の死者は十一人に一人、どれをとっても余りに重い数字である。

大槌町には大槌川と小槌川の二本の大きな川が流れ、今もサケがのぼって来る。仮設住宅は西側の小槌川沿いの道路近くに山手に向かって二十カ所、中央の大槌川沿いの山手に十三カ所。写真の仮設住宅の位置を示す看板の右側、井上ひさしの小説「吉里吉里人」で有名な吉里吉里地区の六カ所など、いずれの仮設住宅もかつては余り住宅がなかったところに建てられている。

震災前、町の中心で

寒さを防ぐため出入り口部分だけ波板で囲まれた仮設住宅



あつた大槌駅や町役場周辺には仮設住宅は一軒もない。つまり、住み易いかつての町の中心ではなく、小高い山手の不便な所に建てられている。

平地で住み易い町の中心部は今回の津波で壊滅的な被害を受けた。だから仮設は安全な高台に建てられた。激しい津波と地震で二、三前後地盤沈下しているから、そこには仮設は建てられないという事情もあるらしい。

ただ今回、仮設住宅を訪れて感じたことは、仮設住まいという厳し

い状況の上に、不便な場所にあるため、そこで生活は想像以上に大変だということだ。安全が第一というのかわかる。しかし我々が泊まった支援ベースキャンプは震災前の町の中心地にある。安全という建て前より、千年に一度という確率を考え、何とか仮設住宅をもっと便利な所に建てられなかったのだから、特に個人住宅再建の見通しが一年九カ月過ぎた今も全くついていないという現実には、その思いを強くした。仮設にある集会所で

我々が会った人の多くは高齢者。車もなく、運転もできない人にとつては不便なところ閉じ込められているように思える。

次は仮設住宅の狭さの問題。一人なら四畳半一間、二人住まいは四畳半二間、三人以上では四畳半二間と六畳が基準らしい。一、二カ月ならともかく、自宅再建の見通しがたらず、仮設住まいが長期化している中で、部屋の狭さが仮設住まいを苦しくしている。今年さらに寒さだ。今年

の冬は特に寒いが、玄関とも呼べない出入り口部分を波板で囲ってある。あとから寒さを防ぐために取り付けたようだが、これでどれだけ防げるのだろうか。とにかく仮設住宅も問題だらけのように思えた。

我々との交流を終え「またこれから一人と言いつつえをついて自分の仮設住宅に帰る老婦人の後ろ姿やガレキと仮設の間で遊ぶ子どもたちをカメラで取めながら、胸が締めつけられる思いがした。



仮設施設を表示した看板